

## P2-074

### 乳幼児期における味付けの実態調査

脇 真由美<sup>1</sup>、緑 寿美子<sup>1</sup>、小泉 創<sup>1</sup>、  
岡 哉耶花<sup>1</sup>、三浦 眞樹<sup>1</sup>、太田 百合子<sup>2</sup>、  
山野 裕<sup>1</sup>

<sup>1</sup>アサヒグループ食品株式会社

<sup>2</sup>東洋大学ライフデザイン学部

#### 【目的】

乳幼児期に培われた味覚や食事の嗜好はその後の食生活にも影響を与えると考えられており、この時期は固さなどの物性だけでなく、味付けにも配慮することが重要である。弊社ではベビーフード自主規格に従い、各月齢に応じて味付けされたベビーフードを提供しており、この中には離乳食初期から与えられる調味料も開発している。今回は乳幼児の専用調味料がどれだけ使われているか、また大人と同じ味付けにする時期がいつ頃なのか実態を明らかにすることを目的に調査を行った。

#### 【方法】

調査は、2016年10月20日(木)～24日(月)に子育て中の女性(20～29歳)を対象として、インターネットによる直近1ヶ月の子どもの食に対する実態調査を行った。子どもは9か月～5歳までを9区分にし、1区分200人、合計1,800人を対象に調査を行った。第1子、第2子以降で半々、就業・未就業で半々となるように調整した。食事を子どもにあげる際に、「ベビー用などの専用調味料を使っている」「大人と同じ調味料で薄味にしている」「大人と同じ味付けにしている」「まだあげていない」のいずれに当てはまるか質問した。

#### 【結果】

主菜(肉・魚料理など)をあげるときの味付けについて調査した結果、9か月以上12か月未満の69人(34.5%)が乳幼児の専用調味料を使用しており、15か月以上18か月未満には14人(7.0%)まで減っていた。また第1子と第2子で比較したところ、第2子の方が使用者は少なかった。

大人と同じ味付けにする時期については、18か月以上24か月未満では94人(47.0%)が、2歳では131人(65.5%)が大人と同じ味付けにしていた。離乳食の期間でも、9か月以上12か月未満では16人(8.0%)、12か月以上15か月未満では39人(19.5%)、15か月以上18か月未満では56人(28.0%)が大人と同じ味付けにしていた。また、第1子、第2子で移行する時期に差がみられ、第2子の方が月齢の低い時期から大人と同じ味付けにする割合が多かった。親の就業・未就業では差はみられなかった。

#### 【考察】

乳幼児の専用調味料は第1子での離乳食作りで多く選ばれており、簡便さに加え、はじめての離乳食作りの不安を解消するために役立つと考えられる。大人と同じ味付けにする時期については、離乳食後期から大人と同じ味付けにしている家庭もみられ、家庭によっては親と同じでは味が濃すぎる可能性があるため、薄味が心がけることができるようなサポートを考えていきたい。

## P2-075

### 食生活サポートチームの活動集計から見えた離乳後期・幼児食移行期における問題

入江 泰子<sup>1</sup>、稲垣 智子<sup>1</sup>、延原 愛美<sup>1</sup>、  
梶 勝史<sup>2</sup>、園府寺 美<sup>2</sup>

<sup>1</sup>社会医療法人真美会 中野こども病院 栄養科

<sup>2</sup>社会医療法人真美会 中野こども病院

#### 【はじめに】

当院は小児専門の急性期病院であり、子どもの特性を考慮して栄養士・心理士・保育士の3職種が食生活サポートチーム(n-NST)を構成し、連携して介入を行っている。栄養士が行う栄養スクリーニングは主観的包括的評価であり、体重や検査値だけでなく、基礎疾患や成長曲線、栄養方法(月齢相応か)、家族背景などを踏まえた上で総合的に判断している。今回、乳幼児期の食事支援を充実させることを目的に離乳後期から幼児食移行期に陥りやすい問題点とその原因について検討したので報告する。

#### 【対象と方法】

2016年4月から2017年3月までの当院全入院患者3670件中、n-NST活動対象となったのは534件であった。そのうち、特に体重増加不良が介入事由となった2歳未満の患児130件に着目し、その要因を分析した。

#### 【結果】

対象者の月齢を3か月毎に区切って集計すると9か月から1歳5か月までに集中しており、離乳後期もしくは離乳食から幼児食への移行期に相当した。体重増加不良に重複してあげられていた介入項目は、離乳食が37件、乳汁過多が33件、貧血が26件、食物アレルギーが17件の順に多かった。また、対象者のうちの50件にベッドサイド指導を含めた栄養指導を行っていたが、その記録から離乳食が進んでいない原因について分類を行ったところ、子どもの発達や個性の問題が13件に対し、親の知識や技能不足が31件、「楽だから」、「時間がない」などの親の都合が17件、親自身の食習慣や生活習慣に問題ありが7件と、親側にも何らかの要因があることが多く、入院中に発達に合わせた離乳食を提供し、アドバイスをこなうことで食べられるようになる例もあった。

#### 【考察・まとめ】

n-NST活動の記録から、1歳前後の体重増加不良や貧血の原因が離乳食のつまづきから始まっていると考えられる症例が多数あった。離乳後期は、離乳食と乳汁のバランスが重要で、入院時の体重や見た目だけでは栄養状態を判断できないが、成長曲線で出生時から体重の変化を観察し、親への聞き取りを行なうことで離乳期の食に関する問題を発見することができる。一般的に離乳食の指導は、開始前の4か月健診時に保健センターなどで行われるが、以降は個別の相談を受ける機会は少ないのが現状である。今回の調査結果から離乳後期にも家庭背景や親の技量なども考慮して個々に合わせた適切なアドバイスをしない、スムーズに幼児食へ移行できるよう支援していく必要があると思われる。